「化学の原典」の編集に参加して

朽　津　耕　三（化学）

日本化学会編「化学の原典3　構造化学Ⅰ」(東大出版会 1974) 183 ページ

“教科書に一行で書かれている知識，今日からみればきわめて簡単自明とみえる知識も，それを獲得するのに，先人がいかに努力し，あるいは誤り，あるいは迷いつつ，やがて正しい道を探りあてるに至ったか，原典について，そのありのままの過程を学びとることによって初めて，単なる知識の堆積ではない，血の通った，生きた化学を体得することができ，そこに偉大な芸術作品などに相通じる人間の精神活動の美しさをみることができる。”(刊行の言葉の一節)

“古典に還れ”という言葉は人文・社会系の学問に限ったことではない。私たちも最近の論文や教科書を読んでいるうち，文献を辿り辿って源流にまでさかのぼってみたいという思いをしばしば強く持つ。学生時代の友人の中には，あまり暇もなさそうなのにそれを勤勉に実行していた人もあったが，私には及びもつかなかった。何よりも，“古典”の大部分がドイツ語であるのは恨めしかった。

日本化学会で，“原典”の翻訳と解説集が刊行されることになり，長い準備の末に上記の第1冊が 11 月 10 日に発行された。これから毎月1冊ずつ出される予定の全 12 巻には，化学結合論Ⅰ，Ⅱ，構造化学Ⅰ，Ⅱ，反応速度論，化学反応論，界面化学，元素の周期系，希ガスの発見と研究，有機化学構造論，有機立体化学，有機電子説が企画され，それぞれに 2～10 篇の論文が集められている。原著者の半数ちかくに当たる 22 人が，ノーベル賞受賞者である。

この巻の編集者である東　健一教授（早大理工）が，“構造化学の発展に最も重要な寄与をした論文とは何ですか？”というアンケートを 25 人ばかりの研究者に送られたのは，1972 年 5 月末のことであった。Pauling の“化学結合論”(419 ページ) をあげられた和田昭允さん（物理）のような賢明な方々は難（？）を免れたが，手ごろな長さの論文をあげた私たちには，やがて東先生から，“適切な原典”をあげたことに対するおほめの言葉とともに，“ついては貴下にそれを翻訳・解説して頂きたい”というお便りが届けられた。東先生が Oxford 大学で Sutton 博士とも慎重に検討されたのちに選ばれたのは，Laue, Bragg, 仁田　勇（X線結晶解析），Debye, Errera, 水島三一郎（誘電分散），Raman（ラマン効果），Debye, Mark（気体の回折），Pauling（イオン結晶の構造），Bernal-Fowler（水の構造）の 11 篇であった。(別に分子分光学関係の論文 10 篇が構造化学Ⅱに集められた。また Born-Oppenheimer, Heitler-London, Slater, Pauling, Mulliken, Lennard-Jones, Hückel の論文が化学結合論に集められた。)

こうして私も2篇を担当することになったが，古い論文をていねいに読むのはなかなか大変であった。現在からみて理解しにくい言葉や記号もあったし，引用文献や図の説明が不親切なほど少く，とくに当時は自明だったためか，“誰々の理論とか実験結果”が引用なしに出て来るのに閉口した。折角“原典”にまで戻ったつもりだったのに，もっとさかのぼって歩き廻りたいという気持も起こって来たが，余裕と力のないのが残念であった。“歴史に興味を持ったらきりがない”という先輩の言葉がよくわかるような気がした。当時ドイツから帰国されたばかりの山崎助手（化学）に教えて頂いたこともあった。

原稿が集まったとき，東大出版会に最も近いからということで，編集のお手伝いをすることになり，それからがまた大変であった。大先生の訳された原稿を読んでいると，意味の通じない所が出て来る。原論文と対照すると，1文章がそっくり抜けていたり，とんでもない誤訳

だったりということもあった。“猿が木から落ちる”確率は，どうやらあまり小さくはないということがわかった。原著者の文章は，まさに玉石混淆と思われた。ほれぼれする名文があるかと思えば，晦渋という言葉が当てはまるようなひどい文章もあり，編集の役目としてさえ読むのが苦痛なものさえあった。私たちはいつも追随者の書いたわかりやすい解説について学んでいるので，ときには開拓者の粗削りな筆に接するのもよい薬なのであろう。

これに反して，訳者の書かれた解説は例外なしに面白かった。かえって原論文が前座のように思われるものさえあった。上記の刊行の言葉そのままに，怪我の功名から新事実が生まれて来た話や，研究者間の協力と競争の裏話などには，芝居の楽屋裏に案内してもらったような楽しさがあって，解説ばかり読みたくなる気持を押さえ難かった。たとえば Bragg のX線回折の論文の解説には，物理教室の寺田寅彦・西川正治両先生の昔話も出ている。

原著者の写真があった方がよいというので机の抽出を探しまわったり，レイアウトを考えたりしているうちに，最終の校正刷が来たので眺めていたら，“Vernon (1884～1891) は何々を研究し，”という文章に出会ってびっくりした。解説の原稿にちゃんとそう書かれていたのである。さっそく訳者にお知らせして，ことなきを得た。

“私の読んだ本”について書けという小堀先生のお話であったが，以上からおわかりのように，“私の読まされた本”ということになってしまった。

(追記) やっと出来上がった本の目次を開いたとき，あっと驚いてしまった。12 篇の解説者の名前が，みんな一二三のどれかで終っているではないか！ 麻雀好きの院生に見せたら，編集者の「東(ひがし)」先生が 2 篇の解説を書いておられるので，それを頭にしたらホンイチで上がれるかもしれない，と首をひねっていた。